

血液透析導入6年後にオスラー病と診断された1例

長崎腎病院

○澤瀬健次 佐々木 修 一ノ瀬浩 原田孝司 船越哲

【はじめに】

オスラー病は、皮膚・粘膜の毛細血管拡張や出血、多臓器の動静脈奇形を特徴とする遺伝性疾患である。

【症例】

60才女性。平成21年7月、末期腎不全にてHD導入となる。消化管出血が数回あり、平成25年には、十二指腸粘膜の血管拡張に対してレーザー凝固術を受けた。鼻出血も時々あっていたが、自然に止血していた。平成27年4月、肺水腫で入院。胸部CTで結節影あり、呼吸器内科に紹介。造影CT施行され肺動静脈瘻と診断された。同7月、肺動静脈瘻に対して塞栓術施行。改めて家族歴など詳細な問診が行われ、オスラー病と診断された。この入院の際に、僧帽弁閉鎖不全症、左総腸骨動脈狭窄症を指摘。8月に僧帽弁形成術、11月に左総腸骨動脈拡張術を施行され、ワルファリン、クロピドグレルによる抗凝固療法が開始された。当院での外来透析を再開していたが、自宅で意識不明となり救急搬送され脳出血で死亡された。

【結語】

今回、透析導入後6年目に肺動静脈瘻の診断を契機に、オスラー病と診断された1例を経験したので報告した。